

日食の月

7月22日10時55分58秒(奄美の場合)、予定されたとおり一分一秒変わらず、日食が始まる。何億年も前から計画され予定された現象が、東京駅発ののぞみが発車するように秒を違えず現実のものとなることに、あらためて驚きを感じる。何回かに一度ぐらいは車両故障による遅延のようなものはないのかな、と余計なことを考えるが、そのようなことは起こらない。

輝く太陽の下で全くその姿を見せなかった月が、着実に計画どおり少しずつ太陽を覆っていき、遂にはすっかり太陽を我々の眼から遮断する。それは、今まで姿を見せなかった真昼の月が皆既でその全貌を現すということであり、我々が見るのは欠けた太陽・黒い太陽ではなく姿を現した月、黒い月である。・・・なのに、この日の主人公は相変わらずコロナやダイヤモンドリングが賞賛される太陽であり、本来主役であってもいいはずの月は感心される様子もない。気の毒なお月様。

9月の上旬に、中国の研究機関等の方々と意見交換する機会を持った。彼らは、中国の農村そして農村に暮らす多くの農民をいかに豊かにできるか、を真剣に考えている。日本の制度についても大変関心が高く、JAグループに関しても「零細農家を守るには組織化の問題がある。中国の大きな問題は農村金融が円滑に回っていないという点であり、日本の農協信用事業のように農家レベルの信用事業が確立されることが重要」(中国社会科学院農村発展研究所)との見解や、「穀物の安定輸入という点で、日本では輸入ルート確保ができており、とくに全農の役割が大変参考になる」(同)との見方が示された。

また、WTO農業交渉についての彼らの認識も次のように厳しいものだ。中国農業にとってWTO加盟は大きな犠牲を払う結果になっている、農業の犠牲によって工業製品輸出の拡大につながったがもう後戻りはできない。現状では様々な補助政策で息をついているが、その効果は限られたものであり、やはり農家所得向上のためには農産物価格を引き上げるしかない。価格政策が必要だが、ここまで関税が低くなっている現状では有効な価格政策を実現できない。その点、日本は米政策に非常に大きな力を入れて守っている、日本の国内支持政策、ブルーボックスの活用方法について中国も研究したい。日本が主張した多面的機能について当初その狙いが十分に理解できなかったがここに来て良くわかった、ドーハの次に新しい枠組みを構築できるなら、零細な東アジアの農民の権利を正しく主張できる枠組みを作るという点で共通の認識を持てるだろう、云々。

彼らの話を聞いて、日食の月を思い浮かべた。誠実に努力を積み重ね、農村の貧困から脱したわが国の取組み、そして協同組合の取組みが当たり前前に評価されることがうれしい。

一方向からのみ眺めても、物事の本質はつかめない。とくに今月号のテーマの農業政策ほど多角度から見る必要があるものはないだろう。新政権の政策がどのような位置にあるか等、EUの農業政策と合わせてお読みいただければ幸いです。

((株)農林中金総合研究所 専務取締役 岡山信夫・おかやまのぶお)